

- 1 期 日 平成30年12月3日(月) 受付11:30～  
会議13:00～17:00
- 2 場 所 味の素ナショナルトレーニングセンター 大研修室
- 3 参加者 尾縣専務理事、麻場強化委員長、山崎強化ディレクター、協力団体強化責任者  
都道府県陸上競技協会強化責任者
- 4 議 題 (1) コンプライアンスに関して  
(2) 2018年度活動報告及び今後の日本代表選考方針  
(3) 競技者育成指針について  
(4) ワールドランキング制度の概要説明  
(5) 競技運営に係るルールの解釈について  
(6) 2019年度主要競技会日程(案)  
(7) ドーピング問題について  
(8) 味の素ナショナルトレーニングセンターの利用について  
(9) その他
- 5 行 程 【往路】12月3日(月) 日帰り  
大分空港7:55発 JAL→羽田9:30着→味の素ナショナルセンター11:00着  
【復路】  
味の素ナショナルセンター17:10発→羽田19:55発 JAL→大分空港21:30着
- 6 経 費 日本陸連負担
- 7 内 容 あいさつ (尾縣 貢 専務理事)

「2020東京まで1年と8か月になった。東京オリンピックまでも大切だが、その後、スポーツ庁等の補助金はなくなるかもしれない。東京オリンピック後についても、危機感を持って国際競技力の向上として世界第3位を目指す。また、すべての人が陸上競技を楽しめる環境をつくるウェルネス陸上の実現という2つの方向性を出し、目標を立て確実に進むために競技者育成指針を立てた。一人でも多くの子どもたちが陸上に関わり続けるために、新しいことに取り組む。新しいことをやろうとするとき、不安が生まれるが強化メンバーはかなりの心構えでやっている。それぞれの立場で協力をお願いしたい。」

#### (1) コンプライアンスに関して

(上田大介 JOC選手強化部インテグリティ教育ディレクター)

JOCのインテグリティ教育(講師派遣研修プログラム) JOCが取り組む教育事業の内容とその背景

今、スポーツに対する環境が変わってきている。ダーウィンは進化論の中で「次に生き残るものは環境の変化に適応できたものだ」と言った。環境の変化に対応するためにどうしたらよいか?それは「選手が自分で判断して行動できる教育」である。競技力を向上させるためには人間力を育てることが必要で日本独自の教育が必要である。JOCも「人間力なくして競技力向上なし」とスローガンを掲げている。インテグリティとは、誠実、

真摯、高潔などの概念を意味する言葉。JOCはインテグリティ教育事業を行っており、①一人一人がアスリートのあるべき姿を考える。②今の自分に足りないものは何か考える。③自分がどうなりたいのかを知る。これらを強制ではなくアスリートを尊重して彼らが自ら考えるようなプログラムを組んで実施している。

バスケットボールの日本代表が買春で問題になり、バスケット協会が謝罪したが、その後何か月もしないでバスケットの選手が窃盗事件を起こした。その都度指導はしているがこのような事象が他の競技団体でも起こっている。選手自身が考え行動できよう教育プログラムが必要である。

現場で何をすべきか？選手に伝わらなければ意味がない。では、誰が何をやるべきか？皆さんも考えてください。

## (2) アジア大会報告 (麻場一徳 強化委員長)

今大会の選考基準は、前回のアジア大会の3位の記録を参考にした。目標は銅メダルを金メダルに上げる。4・5位をメダルレベルに上げる。女子レベルを引き上げることであった。金メダル目標は4個(男子4×100MR、十種競技、50km競歩、男子マラソン)であったが、男子200m、棒高跳の2種目の合計6個獲得できた。

### ○今大会での具体的な取り組み

- ・競技環境及び生活環境の事前調査  
競技場、選手村、交通事情、村外・支援スタッフ宿舎、など
- ・ジャカルタの気候・生活環境への準備  
事前研修会(全体ミーティング)の開催  
免疫力低下防止への取り組み
- ・事前コンディションチェックの実施  
帯同ドクター、トレーナーとの連携
- ・暑熱対策の実施(リハーサル)  
科学委員会との連携
- ・スタッフ間の連携・情報共有システム構築  
帯同スタッフ、村外スタッフ、パーソナル・スタッフ、など

### ○チーム・マネジメント

連携：役割を超えた連携(補い合い)  
選手 コーチ パーソナルコーチ・トレーナー  
サポートスタッフ(ドクター トレーナー 科学スタッフなど)  
事務局スタッフ(現地及び日本)  
外部スタッフ(解説者 視察スタッフ など)  
共有：情報の共有 戦略・戦術の共有 プロセスの共有  
そのためのきっかけづくりを大切に

★マラソンの井上選手のラストスパートで接触があったバーレーンの選手側から抗議があったが、日本から送られてきたマラソン中継のVTRで、バーレーンの選手が井上選手を押しつけ内側から上がろうとしてバランスを壊した映像が証拠となって抗議は取り下げられた。

## ○2020東京オリンピックに向けて

目標：①メダル・入賞を1つでも多く

②舞台に立つもの（出場者）を一人でも多く

戦略：今後の具体的取り組み

①3本柱（男子リレー、男子競歩、男女マラソン）を中心としたメダル獲得プロセスの強化

②個人をターゲットにした具体的強化プロセス

③強化プロセスに直結する選考方法と立案（ex、MGC）

④ワールドランキング制の研究と利用

⑤東京につながる2019年シーズンの取り組み

⑥女子リレーの特別対策プロジェクト → タイムを決めてメンバーを公募する

## ポイントは5つ

- ・「チーム力アップ」を実現するマネジメント
- ・医科学的バックグラウンドの強化、完成
- ・代表選考の客観化、明確化、透明化
- ・到達地点（目標）及びプロセスの具体化
- ・積極的な情報発信（多くの方々から応援していただける取り組み）

## ○ナショナルカテゴリー日本代表の選考方針

（T&F＝山崎一彦 強化ディレクター）

- ・アジア大会 標準記録を突破したもの
- ・オリンピック ワールドランキング制を取り入れる
- ・アジア選手権 ワールドランキング制のポイントが高い
- ・ドーハ世界選手権 標準記録設定（ワールドランキングがスタンダードになる）  
9月16日までに突破したらOK 日本選手権優勝でクリアー

（長距離・マラソン＝河野 匡 強化ディレクター）

- ・MGCはある一定の評価をえている。テーマをもってやっても成果が出ていない。  
マラソンをやるためには3000m、5000mをしっかりとってこそマラソンのレベルも上がる。マラソン9月15日MGC実施

### (3) 強化育成指針について (尾縣 貢 専務理事)

この指針は、2018. 11月に出した。陸上競技を楽しみながらやる。自分の力を出しきるために陸上の価値を見出し陸上競技を続けてほしい。国際競技力向上は2040年世界第3位、ウェルネス陸上20万人を目指す。

小学生陸上も来年新しい変化がある。高校生のタレント発掘、適性種目の実施、多くの子どもたちが陸上に関り競技を続けるそして生涯にわたって関わる。新しいことをやると痛みを伴うがかなりの覚悟でこの指針を出した。陸上に関わる子どもたちに幸せになってほしい。

#### ○競技者育成指針 (山崎 一彦 強化ディレクター)

- ・様々な問題、課題を根拠に基づいて解決策を見出そう
- ・陸連と地域の強化スタッフが協力してやる
- ・東京オリンピック後の環境をつくる

6つのステージ (別紙リーレット参照羽田野保管 または陸連hp参照)

- \*ステージ1 0歳～6歳 幼稚園・保育所など
- \*ステージ2 6歳～12歳 小学校期
- \*ステージ3 12歳～15歳 中学校期
- \*ステージ4 15歳～18歳 高校期
- \*ステージ5 18歳～ 大学・社会人期
- \*ステージ6 ~生涯

- ・競技会の設定

種目の変化 (重さ、距離、オリンピック種目でない種目など)

高1年生の1月～3月生まれ Jr オリンピックに出られる

- ・2020鹿児島国体

300m 300mHの実施 (スピード養成のための種目変更)

各地域でも競技会で取り入れてほしい

(課題等)

1台目までの距離は45mか50mか? 50mだとポイントを変えなくてもよい。

### (4) ワールドランキング制度概要説明 (平野 了 陸連事務局)

- ・2019年から動いていく。aws.iaaf.org ローマ字表記で正確にしないと違う人になる。
- ・日本の大会はFランクが多い。日本選手権はBランク。日本グランプリになって外国選手が多く出るとランクが上がる。
- ・2019年10月からポイントをとっていく必要がある。
- ・強化対象の選手にはサイトを見るよう伝えている。

### (5) ドーピングについて (河野 匡ディレクター)

実業団駅伝ユニバーサルエンターテイメントが失格となった。

メテノロン 蛋白質同化薬 TUE を申請して競技会に出ること。

(6) 女子リレー新プロジェクトについて (山崎 一彦ディレクター)

- ・100m 11 “75 200m 24” 25 400m 54 “80 の記録またはそれに近い記録を対象に公募する。(公募選抜システム)
- ・説明会を12月15日(土)に実施する。
- ・目標は東京オリンピックに女子リレーも出場する。

8 所 感

この強化責任者会議の出席は2回目であったが、今回は東京オリンピックについてより、東京オリンピック後の日本陸連の方向性を地域の強化責任者に伝える趣が強かった。会議は4時間と長丁場で休憩も途中7分程度しかとられず始終緊張感ある中で行われた。また、尾縣専務理事から競技者育成指針作成にあたり「かなりの心構えでやっている。新しいことを始めるときは痛みを伴う。」などの話が出たが、まだ地域には浸透していないこともあり一部ピンと来ない部分もあったが、日本陸連競技者育成指針は普及用リーフレットがあり、大分県の指導者や競技者だけではなく、陸協HPなどで広報できればと感じた。

大分陸協強化部としては、日本陸連の方針にのっとり強化策をより具体的なものにして強化を進めていきたい。それにしても、1年と8か月後東京オリンピックに大分県に関わる競技者の出場は夢なのであろうか？2019年9月まで希望は持ち続けたい。

まずは、2018年12月から私たちができる強化を強化部スタッフ一同が知恵を出し合い実施していくしかない。

報告書について聞きたいことなどになりましたら連絡下さい。